

令和二年お盆法話

死の覚悟

正信寺 釋英和

令和二年七月十二日 正信寺 お盆 法話

死の覚悟

釋英和

【はつめい】

本日は、お忙しい中、お参りいただきまして、ありがとうございます。

春のお彼岸は、新型コロナウイルスの集団感染があり、皆様の安全を考え、残念ながら中止とさせて頂いていただきました。お盆の法要を営むことができることは、感謝の気持ちを新たにしたいと思います。

オリンピックが延期になりましたが、七月二十三日が海の日、二十四日はスポーツの日と祝日が続きます。何だか、空しいような、恨めしい感じもします。

新型コロナウイルスも風邪の一種と聞きました。戦後、日本の医療は進歩を続け、風邪くらいでは死ぬことはないと思うようになって久しいと思います。

死ぬのは、癌か老衰と思われてきました。そして、死ぬのは病院で、自宅で死ぬことはないような昨今です。戦前は、死の病であった結核ですら、ペニシリンの開発で、治る病気になりました。癌でも、早期発見、抗がん剤の進歩で、五年後の生存率は、五十パーセントを超えて、治る病気になりました。

新型コロナウイルスの感染は、こうした常識を覆し、ひよっとしたら、私も数日の後に死んでしまうかもしれないという、危機感と恐怖感を感じるようになりました。新型コロナウイルスは、それほど怖いものです。

【苦を解決してきた現代人】

四苦というのは、生病死です。人間が生きる上で、避けて通れないものです。

この生病死は、戦前くらいまでは、自分で向き合い、家族や自宅で解決してきたものではないかと考えます。ところが、人間は苦から逃れるため、いろいろと工夫してきました。

人が出産し、声明を授かることは、母子ともに生とは反対の死亡リスクの高いイベントでした。そこで、母体と嬰兒を不慮の死から守るよう、産婆さんという出産の専門家を育成し、知識や技術を蓄積して、だれでもその恩恵に預かれるよう組織化しました。しかし、感染症や大量出血など、自宅では対応できない事例に、産婦人科という医学と施設を用意し、今までは救うことのできない、未熟児を集中治療室でケアし、生きることを可能にしました。

病の苦からの解放、病気の治癒は、江戸時代より前は、科学的根拠がない加持祈祷に頼っていました。さすがに、現代では、科学的な医学に頼るところが大きいです。また、レントゲンや細菌学など技術も体の病気だけでなく怪我、メンタルな病気の苦から、人を解放しようとしています。もちろん、医学を志す方たちの志の高さも、病の苦から人を解放することを支えていることを付け加えておきます。

老の苦しみに、対応してきました。容貌が衰える老化に対しても、皺や弛みを取る美容整形が行われています。また、機能が衰えてくる老化、例えば、老眼の進行を遅らせるサプリメント、膝の関節の痛みを緩和するサプリメントなどが、誰でも手に入るようになりました。

中国の皇帝は、不老不死の薬を求めていましたが、現代日本に中国の

皇帝がいたらどう思うでしょうか。

人々は、苦を乗り越えようと、お祝いをしてきました。

生まれた子供が成長すれば、七五三、成人式とお祝いをします。病気が治癒すれば、快気祝いをします。年をとっても、長寿を祝います。還暦、古稀、米寿、白寿と、長生きする目標ができます。

年を取ったら、年を取ったで、楽しみもあります。また、正月が来た、桜が咲いた、紅葉が見られたという季節の移ろいが日本にはあります。花見、月見、紅葉狩りというイベントを迎える楽しみもあります。孫が生まれるまで、元気でいようと、楽しみを目標に前向きに生きるように努力することもできます。

死の苦しみについては、どうでしょうか。仏教では、葬儀と法要が残された遺族の苦を和らげています。これは、「愛別離苦」という、愛している人とも別れなければならぬ苦しさを癒してくれますが、亡くなった本人の死の苦しさを和らげるものではありません。もちろん、お祝いもあります。

【死を受け入れる教育】

私は、昔の人が辞世の句を読むということが、なかなか理解できませんでした。

もっとも、武将が切腹する前に辞世の句を読むのは、自分がこの世から消えた後の人にメッセージを残すことなので理解できます。ところが、人が死期を悟ると、本能的に身辺を整理し、辞世の句を読む気持ちになることは、まだ、わかりません。逆に、高齢な経営者や政治家が権力にしがみつき、次に権力を握りそうな人を追い落とすような振る舞いをする醜さが人間にはあるのではないかと思っています。これは、死を恐れ、

生に執着する煩悩の表れだと感じています。

子供が生まれるときに、親は、子供ができることへの教育を受けます。そして、生まれた子供は、生きていくために、親や兄弟、コミュニティからいろいろな刺激をうけ、その中から生きる知識を得ます。

病気になるように、衛生学、免疫学があり、病気になるれば、東洋医学、西洋医学により治療があります。病気になったら安静にして、薬を飲むという知識があります。

年を取ると、判断能力や運動能力が落ちるので、脳トレをしてボケを防止し、デイケアで運動してケアすることをしていきます。こうすることで、死を迎えることを少しでも遅らせるようにしてきました。死を迎えるまで、体が不自由にならないように工夫してきました。

ところが、人がどのように死を迎えるかという教育は十分でないように思います。宗教というものが、人の死を受け入れ、自分の死を受け入れる覚悟を醸成することだと思えますが、多くの人は、宗教は辛気臭いというか、非科学的という印象が強く、受け入れがたいアレギー症状があるのではないかと思います。

創元社「生と死の教育」(樋口和彦・平山正実編)という本を読んでみました。その本によると、日本では、死を穢れとみる風習が長年続いてきたといえます。ですから、古代の人を土葬するときに、手足を結び、上に石を置いて簡単に出てこれられないようにしています。怨霊が乗り移っていたから亡くなったとか、呪いで祟りが起きないようにと考えたようです。死人は怨霊となって、生きている人を威嚇すると考えていたようです。

反面、医療が進んだ今、末期の患者は、意識の薄れていく中、自分の病状を詳しく知らされず、近親者には説明されているものの、どのような投薬をされているか知らされないことがあります。そのような状況では、明日の自分の命がどうなるかわからないまま、命が尽きていく場合もあります。つまり、自分の死を意識せず亡くなっていきます。家族と別れる気持ちの整理をしたり、辞世の句を読んだりする余裕すらないというのが、現実だと思います。

死を受け入れるという面で、まだまだ、死にゆく人の心が整理されていないと感じます。ターミナルケアという考え方が、最近、浸透してきました、病院でたくさんの方の管をつないで死ぬのか、痛みを伴うが自宅で尊厳を持って死ぬのかという判断を、家族や死にゆく本人に任せるようになってきました。すべての人が尊厳を持って死んでいくかというところ、程遠いという思いを持ちます。

【仏教の教えと新型コロナウイルス感染】

私は、浄土真宗を学び、他力本願を学ぶことが、日々生活することを豊かにすると思っています。いえ、豊かにするというより、現実を受け入れ、心安らかに生きることができると思っています。

ところが、新型コロナウイルスに感染して死ぬかもしれないということに対して、仏の教えはどのように生かしていったら良いのでしょうか。

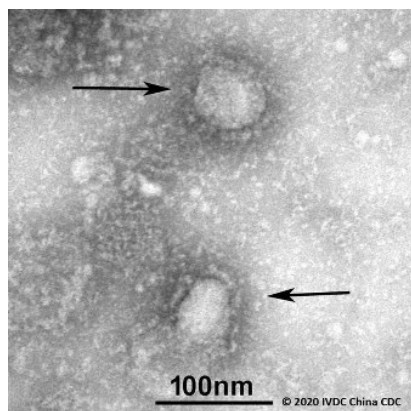
新型コロナウイルスに感染することは、他力本願、阿弥陀様の力にすがるとは、なんとも落ち着かないです。感染しても、どのような医療を受けるかも他力本願、生きるか死ぬかは他力本願というのも受け入れたい現実なのではないでしょうか。もちろん、新型コロナウイルスに対しては、ワ

クチンも抗生物質もないのですから、他力に頼るしかないのですが、この気持ちを誰もが受け入れられるかという疑問符が付きまします。

【目に見えないもの】

ウイルスは普通目に見えませんが、どこを浮遊しているか目に見えないものが感染するのは怖いと思います。

顕微鏡で、新型コロナウイルスは、球形で角が生えているような形をしているという情報が流れました。



電子顕微鏡で撮影された新型コロナウイルスの写真が、ニュースで報道されています。今は、この写真を信じるしか方法はありません。自分の目で確認することはできないのですから。

【フェイクニュース】

新型コロナウイルスにかからないようにするには、お湯を飲めばウイルスが死ぬというフェイクニュースが流れました。「今回のウイルスは耐熱性がなく、26〜27度の温度で死にます」「より多くのお湯を飲んでく

ください」。国内で感染が広がる中、ツイッターなどでこうした情報が駆け巡りました。温度は「36〜37度」など別のケースもありましたが、「知り合いの医者」や「医療関係者の友達」からの情報などとして「お湯を飲めば予防になる」といった趣旨は同じでした。

過去に経験がなく、目に見えない情報なので、こうした情報を信じてしまうことが往々にしてあります。

私たちが、南無阿弥陀仏と唱えようと、阿弥陀如来が臨終のときに来迎して極楽浄土に救っていただける。来迎がなくても、二心なく阿弥陀如来を信じ、決定（けつじょう）していれば、極楽浄土に往生できるというわけにいます。親鸞聖人の教行信証にも確かに記載があります。

ところが、南無阿弥陀仏と唱えた人で極楽浄土に往生したという人の話は聞くことができません。亡くなった人から話を聞くこともできませんし、極楽浄土も目に見える場所ではないので、写真で見ることでもできません。極楽往生が正しい教えなのか、フェイクニュースなのか、どのように判断したらよいのでしょうか。

【迷信を信じる人が増えている】

最近の読売新聞に掲載された全国世論調査の記事を読んで、私は目を疑いました。小さい頃は、「悪いことをすると、バチが当たる」「嘘をつく」と舌を抜かれる」ということをお爺ちゃん、お婆ちゃん世代から聞かされてきました。

私が小さい頃は、昭和の高度経済成長の頃ですから、迷信は信じない風潮がありました。それでも、ほぼ、同数の人が悪いことをするとバチが当たると思っていたようです。

ところが、今年の調査では、人の迷惑も考えないで、自分勝手なことをしたり、残酷なことをしたりする人について、「バチ」が当たるとい

ことが「ある」と思う人は76%に上り、「ない」の23%を大きく上回りました。五十年前の、ほぼ、倍の数値です。

一世を風靡していた芸能人が、スキャンダルでスポットライトを浴びないようになったりすることで、そう思うのか、判断が難しいところですが、悪いことをすると、バチが当たることが、因果の法則として理解されてきたのかもしれませんが。

【極楽往生を信じるための三宝印】

まず、極楽浄土に往生することを信じる前に、三法印を知っていたきたいと思います。お釈迦様が菩提樹の下で悟りを得た時に、三宝印と中道を覚り、八正道を實踐するべきだと考えたといわれています。その三宝印とは、諸行無常、諸法無我、涅槃寂静です。

誤解のないように説明しますが、最近では、御朱印帳ブームで、お寺の御朱印、または、納経札には三宝印という判子が押されているのですが、この三宝は「仏法僧寶」という文字を篆書や隸書や梵字で刻まれています。この三宝は、人々が加護を授かる対象を意味しており、仏教の根本理念としての三宝印とは異なります。浄土真宗では、御朱印を集めるということ自体が自力に相当すると考えて、御朱印を出していません。

さて、三宝印の話に戻します。

諸行無常は、すべてのものは遷り変わる。つまり、永遠の命はあり得ないということを感じる必要があります。自分の生命や家族などの大切なものに執着しても、それが崩れていくことに苦しむわけです。



次に、諸法無我は、すべてのものは、固有の実体がないということです。つまり、生きている自分というのも実体がないのです。五蘊皆空とも言いますが、現在の因果で成り立っている自分も、その因果が崩れ去ると、実体を失う、すなわち、死んでしまうということです。ただし、死んでしまっただけで終わるわけではなく、因果によって輪廻転生とか後生の一大事というように、生まれ変わるということです。

そして、「涅槃」とは、ニルヴァーナともいわれ、吹き消すという意味です。

苦しみの原因である欲や怒り、愚痴などの煩惱を燃え盛る火にたとえ、その火が吹き消された世界、煩惱がなくなった安らかな心のことです。「寂靜」とは、苦しみのなくなった静かで穏やかな世界ということで、「涅槃」と同じことです。生への執着を断ち切ったときに、心が安らかなるということになります。

この三宝印を理解していることで、自らの死を受け入れることができると思います。そして、新型コロナウイルスに感染したとしても、因果関係により、亡くなることもあれば、治癒して生き延びることもあるという真理を知るわけです。

そして、自分ではどうしようもない生死の因果について、現実を受け入れなければなりません。その時、他力を信じ、生への執着を断ち切ることで、心が整い、安心して死に向かい合うことができると思います。

死に対して、心安らかに向かい合うことができれば、念仏による極楽往生の因果を見出し、それを信じることの論理的飛躍や信憑性についての、疑念が晴れるのではないかと思います。

【おわりに】

自分が死んだらどこに行くのか、死んだとき娑婆世界はどうなってしまうのか。残された家族はどのように思うか、わからないことがたくさんあります。

死ぬことは誰も逃れることはできません。ただ、医学の進歩で、延命が容易になり、亡くなる時は、その方の体力や気力が病気や怪我に耐えられなくなる時だと感じていました。しかし、今回の新型コロナウイルスは、エクモという人工肺死が足りなくて、エクモさえあれば延命できたかもしれない人が亡くなるようになりました。今までは、十分医療を尽くして死を受け入れることが多かったのですが、医療崩壊や医療費の高騰で、治療機会を逸して、死を受け入れなければならないことも増えてくるのではないのでしょうか。

自分の死を受け入れる教育は、積極的に受けたくないと思います。ですから、死の覚悟を持つことは難しいのです。

法蔵菩薩の四十八願の成就を信じ、なかでも、十八願の念仏往生を信じるから、輪廻から解脱する不退転の位に住することが真実となり、往生が約束されるのだということだというのが浄土真宗の教義なのだと思っています。

清沢満之の言葉に、「実なるがゆえに信ずるにあらず、信ずるが故に実なり」というものがあります。「宗教は主観的事実なり」という文章の中に書かれているのですが、神仏が存在しているから信じるのではない、信じるから神仏がいるといいます。

二心なく信じるという言葉は、実は、親鸞聖人も迷った上に真実に達したので、皆さんは、私のように迷うことがないようにと記したものと思っていました。清沢満之の言葉を見て、迷わず信じるのではなく、信じるからこそ、自分にとって真実となるという言葉が腑に落ちるようになりました。しかし、自分で信じることは、自力なのか他力なのかという迷いもあり、難しいところです。

新型コロナウイルス感染は、感染経路不明の人でも、他人の体で増殖・培養されたウイルスが体の中に入るといふ因果関係により起こるものです。人との接触を減らすことでウイルス感染のリスクを減らすことはできますが、目に見えないウイルス感染は自分ではどうにもならないものです。自分の防疫努力が完全にはできないので、その因果は受け入れるほかありません。諸行無常を信じることにより、死の後に次の世界がることが真実となり、阿弥陀如来を信じることにより他力による極樂往生をすることができるようになるのだと思います。

三宝印を理解することより、今生きていることが永遠でないことを悟り、ウイルス感染して、ひよっとすると、数日で逝去するかもしれないという、今までの常識では理解できない、ありのままの現実を受け入れ、念仏による極樂往生を受け入れる覚悟ができるように思います。

そして、すべてを受け入れて心が安らかな状況になる、すなわち涅槃に生きることこそ、極樂浄土に往生し、死を受け入れる覚悟ができることなのではないでしょうか。

私は、それに加えて「新型コロナにかからない」と信じて、因果の法則を理解しながら、正しく恐れる姿勢が大切ではないかと思えます。です

ので、日常生活では、手指を消毒し、三蜜を避け、外出時にはマスクをしていきたいと思えます。

本日は、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

浄土真宗

安養山 正信寺